

## 協力校としての取り組み

魚沼市立小出小学校

### 1 研究の基本方針

校内研修の取組を中核として、改善調査の分析を生かしながら全校体制で授業改善を図る。

### 2 研究主題

確かな考えをつくる  
～ 伝え合い 学び合う授業を目指して ～

### 3 研究主題設定の理由

#### (1) 当校の児童の実態から

明るく素直な児童が多く、自分の考えを経験と関わらせて文章で表現しようとする姿勢が伺える。また、学年漢字計算テストの取組や、個別指導の充実の取組によって、繰り返しを必要とする学習にも根気よく取り組めるようになり、基礎学力が向上してきた。

ただ一方では、学習に対する主体的な姿勢や、学習の基礎となる学習習慣、学習規律の定着については、二極化の傾向があるといった指摘もあり、それらの改善に継続した取組や指導の工夫が求められるところである。

#### (2) 昨年度の研修を受けて

一昨年度から研究副題を「伝え合い、学び合う授業を目指して」として、「伝え合い」「学び合い」を授業づくりのキーワードとして、一人一授業公開を原則とした授業研究中心の研修が進められた。子どもたちの曖昧な考えによる発言をていねいに拾い、全体に位置づける教師の適切な働きかけにより、「『ずれ（認識の違い）』を伝えたい」「調べて分かったことを伝えたい」という子どもの思いを引き出し、課題に主体的に取り組む姿を実現させた。

今までの授業実践から、教師が子どもの思いや願いに応じて、伝え合い、学び合う場を効果的に位置づけて授業を組織することが、子どもが確かな考えをもつうえで有効であることが共通認識された。しかし、自分の考えをもたせる時間を確保するあまり、導入が長くなってしまったり、表現力の高い子が話し合いをリードしすぎて、一部の子で授業が進む形となったりするなど、学級全体での学び合いとはならないという課題も見られた。また、自分の考えを表現することで満足し、友達の話をよく聞き、そこからさらにより考えを作り上げていくことも不十分である。どの子も「伝えたい」という思いをもち、友達の話をよく聞き、主体的に仲間に関わっていく学び合いの授業を目指し、今後も、学び合いの授業の具体を明らかにしていくことが求められる。

そこで、今年度も「話すこと・聞くこと」を中心とした子どもたち同士のかかわりを大切にし、必要感のある学び合いを中核とした授業を目指していく。子どもたち同士の学び合いを充実させることで、子どもたちのより主体的な学びと確かな考えの育成を図ることとする。

### (3) 研究主題の意味するもの

今年度も、子どもたち同士の必要感のあるかかわりを生み出すことに重点に置き、特に、次のような「学び」を創造することをめざしたいと考える。

#### <思いや考えを伝え合う>

ここで言う思いや考えとは、読み取りや調べ活動、操作活動などの過程で得られるものである。それらを単に言葉だけとは限らず、絵や図、資料を用いて示したり、身体表現したりして周りの友達に伝えていくことである。

#### <学び合って共に高め合う>

友達の考えを聞き合い、理解し合い、よりよい考えを作り上げ、自分たちで課題を解決していくことである。

### (4) 目指す授業改善の方向

授業の中に、必要感のある子どもたちのかかわりの場を意図的につくることで、子どもたちのより主体的な学習が展開される。また、子どもたち同士のかかわりによって、「思考力」「判断力」「表現力」の高まりをつくる。

#### 期待する子ども像

- ・ 友達との伝え合いを通して、考えをより確かにしたり、考えを深めたり、再検討したりする。

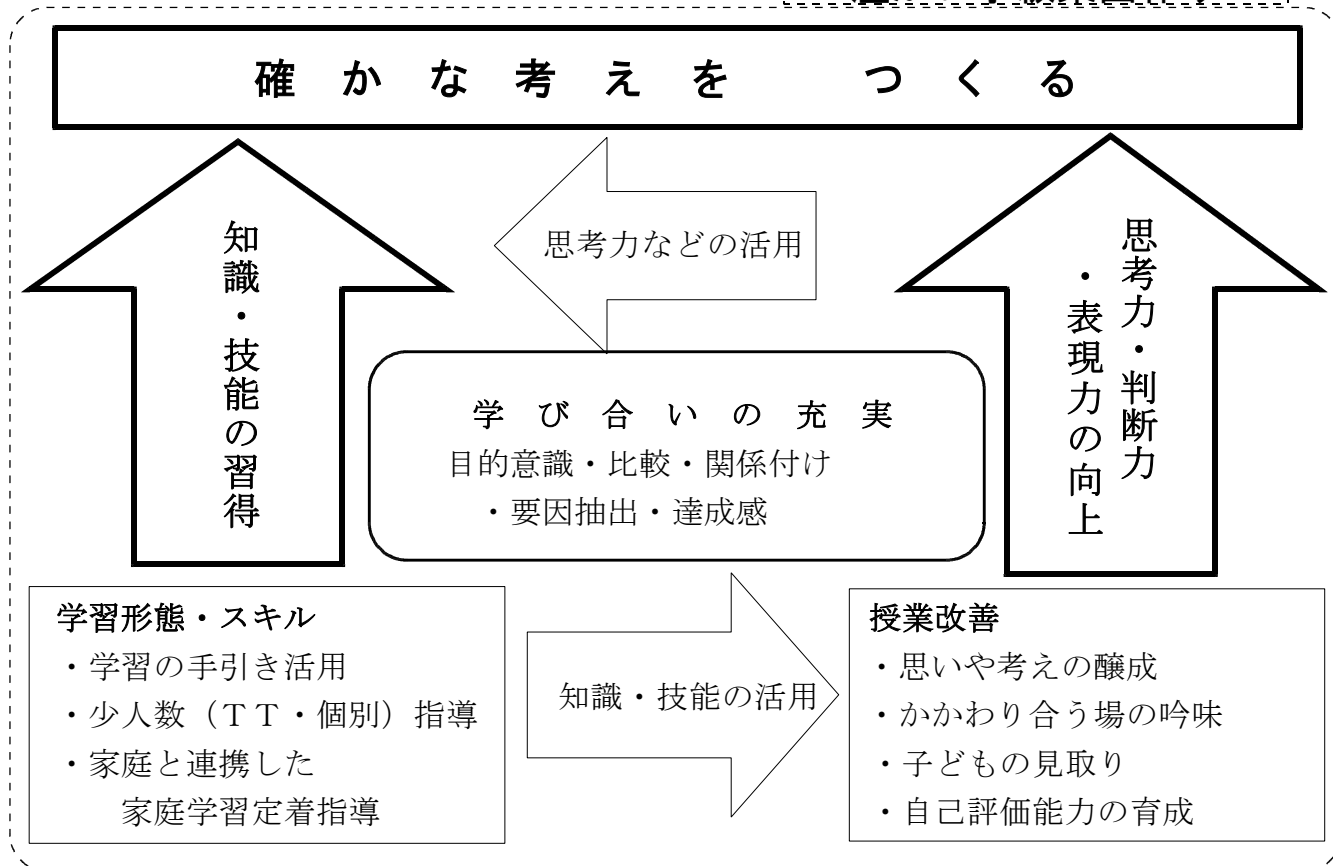
## 4 研究内容

研究主題にこめた、学び合いを生み出し、目指す子どもを育てていくため、私たちが具現する授業像を次のように考える。

○ 自分の思いや考えを述べる目的や喜びを知り、互いに聞き合い、考え合いながら共に分かり合い問題解決していく授業

この授業を具現するためには、次のことを大切にしなければならない。

- ① よりよい聞き方、話し方の習得
- ② 子どもが解きたくなるような魅力的な課題、認識のズレが生じるような課題の設定
- ③ 思いや考えを出し合い、クラスで考えを練り上げたり、問題を解決したりする学びの体験の工夫
- ④ 話し合うことで、問題を解決できたり、主体的に学習を進めたりできるという満足感を味わわせていく
- ⑤ 考えの変容が分かる振り返り



## (1) 教科研究授業の実践

個人研究を中心として、一人一研究授業実践、公開授業を行う。めざす子どもの姿を掲げ、その迫り方についての手立ての有効性を検証し、互いの個人実践に学び合う。

## (2) 月例テスト・Webテストの実施や分析と指導法の改善

月例テスト・Webテスト実施、分析による一人一人の実態把握・学力実態把握を行う。Webテストについては、ファイリングされた正答率などの資料を活用して分析を行う。明らかになったことは指導法を工夫したり、宿題などの課題を出したりするなどして、課題解決に努める。

国語、算数の学年月例テストを学習内容の定着を図る機会として、月一回程度実施する。授業で定着しなかったところ、次の単元のために復習したほうがよいところなどについて学年で分析をし、内容を考える。

Web配信問題及びサポート問題、月例テストの活用として、次のサイクルで実施する。

(過去の配信問題の実施) → 配信問題の実施 (できるだけ早い時期に) → 傾向の把握と全体、個別指導の実施 → サポート問題の実施 → サポート問題ができない子への個別指導 → 月例テストで確実に身につけているか確認 → 再テストなどで個別指導

## (3) さけらっ校タイムの実施

火曜の朝学習の時間を、算数の基礎学力向上のための時間とする。その際、各学年に7学年から1名指導補助に入っていただく。必要に応じて個別指導を行い、学力差に対応できるようにする。

#### (4) 聴く力を付けるための取組

授業中や朝会終了後、朝の会や帰りの会などの時間に、「聴く」力の向上に役立つスキルアップの時間を設ける。「聴くこと」についてクラスの実態を把握し、意図的に指導を取り入れることで、聴き方の基本的スキルを身に付けさせていく。

#### (5) ふりかえり活動

教師が児童に視点を与え、児童による自己評価を行う。学習による成果と課題を明確にし、次時の取組への意欲付けと目標の焦点化を図る。授業後、考えが深まったふり返りを記述した児童ノートを、教室に掲示する。そこに子どもの相互評価を加えることで、自己評価をより確かな実感につなげるようにする。

#### (6) 「温かい学級づくり支援事業」

- ① hiperQ-U, Q-U 調査の実施。(5月, 10月, 1月)
- ② 事例報告シートの記入(全員)
- ③ 学年部1名の事例報告シートを基にした検討会(6月, 11月, 2月)
- ④ 各自が事例報告シートを見直し、今後の方針を追記する。(6月, 11月, 2月)

### 6 本年度の研修日程

#### (1) 教科研究授業の日程

- ① 前期研：6月～7月 授業実践 実践のまとめ
  - ・個人の研究教科・領域や全体に関わる授業研究での指定教科・領域などに基づき、学年部や研究推進委員を中心として授業実践公開授業を行う。
- ② 中期研：9月～12月 授業実践 実践のまとめ 県小教研分析
- ③ 後期研：1月～3月 NRT 学力テストの分析
  - ・NRT 学力テストの分析は各学年で行い、分析資料を学年便りとして作成して、3学期終業式の日個別結果シートと共に保護者へ配付する。
  - ・研修のまとめ(指導案+成果と課題(A4で1ページ))をCDにコピーし配付する。

#### (2) 授業研究について

- ① 研究教科について
  - 教科, 領域は問わない。
  - (国語, 算数については学習指導センターの主事から指導を受けることができる)
- ② 実施について
  - 全員が実施する。

#### ③ 実施日

研修日を決め、低・中・高学年がその日に実施する。サポート学級と級外教員は、人数のバランスを考慮して何れかの部会へ所属する。協議会はその日の放課後、低・中・高学年に分かれて実施する。  
(全体研は月曜日, 学年部研は木曜日を基本とする。)

#### ④ 研究授業の進め方

- 指導案検討会（全体研，中学校区研のみ実施。学年部研では必要に応じて）  
授業日の2週間前を目安に（単元に入る前が望ましい）
    - ・ 単元構想の検討
    - ・ 本時案の検討
    - ・ 具体的な教材，支援の工夫，評価についての検討
    - ・ 授業前日頃に，模擬授業（シュミレーション）を実施し，授業者，学年部員のイメージを明確にすることが望ましい。
  - 授業当日
    - ・ 参観者全員による，子どもの姿の記録，見取り
    - ※ 写真を何枚か撮っておいてください。
    - ※ 授業記録等は学年研推が中心に準備・運営してください。
  - 協議会
    - ・ 自分の学年部に参加。無い場合は自由。（協議会に参加されない場合は，授業感想用紙に記入し，授業者へ渡す。）
    - ・ 記録に基づいた，子どもの学びの足跡の解釈の出し合い
    - ・ 子どもたちの学びの具現状況，達成度の評価
    - ・ 児童が考えを表出している姿を明確にし，今後の教育活動に生かす。
    - ・ 学び合いの有効性
    - ※ 協議会后，授業記録と協議会記録を職員全員に配付する。
- ⑤ 指導案(学年部研・略案)の体裁について(別紙参照)
- ・ A4，2枚程度（表裏印刷）でまとめる。前日までに，職員全員へ配付する。資料がある場合は，可能な限り資料も配付する。座席表は，当日授業会場に置く。
  - ・ 5月実施予定の全体研細案については，授業者と相談しながら形式を決める。この時の形式をモデルとして，11月予定の中学校区公開授業指導案も作成することとする。

#### (3) 「温かい学級づくり支援事業」関連の研修

- ① 研修の日程(ソーシャルスキル研修など)…別紙による
- ② 事例報告シートの記入(全員)…結果到着後1週間以内
- ③ 学年部での事例報告シートを基にした検討会(6月，11月，2月)
- ④ 各自が事例報告シートを見直し，今後の方針を追記する。(6月，11月，2月)

# 研究の実際

～6年国語「時計の時間と心の時間」の実践を通して～

6年3組 米山 智

## 1 単元名 「時計の時間と心の時間」 ～筆者の意図をとらえ、自分の考えを発表しよう～

### 2 単元の見どころ

- ◎ 筆者の主張と事例を利用して、考えたことを発表し合い、自分の考えを広げたり深めたりすることができる。(読(1)オ)
- 事実と感想・意見などの関係を押さえ、筆者の意図を捉えながら、自分の考えを明確にして読むことができる。(読(1)ウ)
  - ・ 文章には、いろいろな構成があることを理解することができる。(伝国(1)イ(キ))
  - ・ 話し手の意図をとらえながら聞き、自分の意見と比べ、生かすことができる。(話聞(1)エ)

### 3 本単元で促したい確かな考えをつくるプロセスとその方策

#### (1) 本単元でめざす姿

- 「心の時間」のズレから生じた事例から、筆者の結論を実感し、自分なりの考えをもつことができる子
- 友達と意見交流することで、自分の考えを見直したり、さらに深めたりすることができる子

#### (2) 具体的な方策

- ① 自分の考えをもたせるために、「心のズレ」から生じた事件集を作成する。  
「心の時間のズレ」から生じた事件を複数個書かせ、全員分をまとめて掲示する。自他の様々な体験から筆者の考えを実感し、自分の考えを導き出すきっかけにもなる。前単元「カレーライス」の主人公、ひろしと父親のすれ違いを例文として提示し、書きやすいようにしておく。
- ② 自分の考えをより明確にするための発問の工夫  
『自分のまわり(家族、親しい友達、クラス、学校、地域)に起こる、「心の時間のズレ」から生じる事件を減らすことはできるだろうか』を問う。それにより、筆者の考え「人それぞれに「心の時間」の感覚が違うことを知っていれば、他の人と一緒に作業するときも、互いに気遣いながらすすめられるかも知れません。」に対する自分の考えをもつことができる。
- ③ 意見交流により自分の考えを深めさせる。  
自分の考えを発表し合い、意見交流をして、さらに自分の考えを深めさせる。友だちと意見交流することで、互いの意見のよさや違いに気付かせ、話し合うことで自分の考えが深まることを意識させる。これらを通して、筆者の主張に迫らせ、筆者の意図を考えさせていく。

### 4 授業の実際

#### (1) 自分の考えをもたせるために、「心のズレ」から生じた事件集を作成する

「心の時間」のズレから起こることは、身近にある。子どもたちにとって一番身近な例は、前単元『カレーライス』の「ひろし」である。楽しいことをしているひろしと、いらいらしているお父さんの「心の時間」のズレが、あの事件を生み出した。こういったことは、子どもたちにもあるだろう。本単元では、「ペースが合わずにイライラしたこと」、「急かされて嫌な思いをしたこと」などの例をたくさん集め、それをしっかりと読み込めば、子どもたちも筆者の主張を実感できると考えた。そして、読み込むことにより、話し合うことにより、それを解決するための方法も、1つ2つ思いつくであろう。思いつかない子は、他の子との話し合いを通して、良いアイデアをまねすれば良い。このように考え、「心のズレ」から生じた事件集を作成した。子どもたちは家族、友達らとの間に起きた事件をカードに記入した。多い子で3つ、少ない子でも1つは書くことができた。自分の経験をふりかえったり、友達の似たような経験を知ったりすることで、「心のズレ」から生じる事件を減らすための方策を考える土台の部分ができた。

## (2) 自分の考えをより明確にするための発問の工夫

公開授業の前の時間に事件集を配り、時間をかけて読ませ、教科書の8段落の、『また、人それぞれに「心の時間」の感覚がちがうことを知っていれば、他の人といっしょに作業するときも、たがいを気づかいないながら進められるかもしれません。』という文に着目させ、次の発問をした。

「筆者は『～かもしれません。』と弱気な言い方をしていますが、みなさんはどう思いますか？」

「自分の周りに起こる、『心の時間のズレ』から生じる事件を減らすことはできるのでしょうか？」

「へらすことはできる」「へらすことはできない」と立場をはっきりさせて、理由を続けて書かせた。

多くの子が、「減らすことはできない」と答えていた。自分の体験を基に、「相手の心や時間を理解するのは難しい」という旨の理由を書いた子が多かった。

そこで、「何もしないでトラブルが起きるのをただ見ているわけにはいかない。現に今、このような事件が起こっているのだから、何かをして減らすべきなのではないかな。」と話をし、公開授業を迎えた。

## (3) 意見交流により自分の考えを深めさせる

公開授業時には、前時に書いた自分の考えと、4つの評価の観点をもとに、発表→メモ→感想というサイクルで意見交流を進めていった。子どもたちは、「わかった?」「それってあるよね」「もう一回説明して」「それってこういうこと?」などと言い合いながらスムーズに意見発表や感想を伝えていた。

全体の流れとして「減らすことはできない」と考えた子が多かったので、ねらいにせまるために、「減らすことはできる」と考えた2名に意見を発表させた。発表後に子どもたちに考えが変わったか、深まったかを問うたところ、多くの児童が友達の発表を取り入れて、判断の根拠となる言葉を付け加えたり、友達からの感想で自身の考えに自信を深めることができたりしていた。このことから多くの児童が考えを深めることができたと考える。

また、減らすことができると発表した児童について何らかの記述をした子が14名、「減らす努力はしないといけない」と書いた子が12名いた。

## 5 成果と課題

### (1) 「自分の考えをもたせるために、『心のズレ』から生じた事件集を作成する」について

○ 自分の体験と筆者の主張を重ねて書かせたこと、友達の多くの事例や似たような出来事があったことなどにより、心のズレに対する事件についての考えをもたせることに有効であった。

### (2) 「自分の考えをより明確にするための発問の工夫」について

△ 公開授業での中心発問は、『自分の周りに起こる、「心の時間のズレ」から生じる事件を減らすことはできるか?』というものであったが、それに対する活動2つにも◎を付けてしまった。まとめに直結する発問として、◎は主発問の1つだけにすべきであった。

### (3) 「意見交流により自分の考えを深めさせる」について

○ メモの観点を提示することにより、意見交流をよりスムーズに、効果的に行うことができた。

○ 考えの「深まり」は見られたが、「変容」は見られなかった。しかし少数派の2名を全員の前で発表させたことにより、別の考えにも目を向ける子が多く見られるようになった。

△ メモに書く時間がかかってしまった。友達の感想を残すための手立てとして行ったのだが、話し合いに重点を置くならば、もっと簡潔なものにすべきであった。

△ 筆者の考えはどのようなか、教科書の叙述をもとに考えさせる時間を、もっと取る必要があった。